
義妹への罪

今西 克己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

義妹への罪

【Nコード】

N5185T

【作者名】

今西 克己

【あらすじ】

義妹を救うために人間としての罪を犯した兄……。

夕暮れになると義妹が僕の部屋にやって来る。

栄養をろくに摂らず、やせ細ったその身体は見ていただけで痛々しく哀しくやるせない気持ちにさせられる。

「お兄ちゃん」

すぐるような媚を売るようなとにかく弱々しい、精気のない声に愛おしさを抱いているのは否定できない。

「いつものやつか？」

僕がそう言うと義妹は恥ずかしげに目をそむけ微かに頷く。なんとたまらなく可愛らしい少女であろうか、僕は義妹を優しく抱きしめる。

「痛くないかい」

「うん、大丈夫」

また痩せたことを言うのは彼女にはタブーである。

しばらく抱き合った後、僕は彼女に部屋までお姫様抱っこをして運びベッドに寝かせ掛け布団を掛け彼女が眠りにつくまで手を握り雑談を交わす。

「義母さん、マリコは眠ったよ」

食卓には夕飯がしたくがしてあった。

「諒一君、いつもありがとうね」

「かわいい義妹ですから」

僕と義母はたどどしくおしゃべりをし夕食を共にする。親父が再婚をして十年になるがいまだに僕と義母には見えない線が引かれている。義母が若々しく美しいせいでもある。

ブラウンのウェーブ掛かった艶めく髪にきりつとした意志の強そうな輝きを放つ黒い瞳、紅い唇は男を幾らでも惹きつける妖しさを漂わせている。

実を言うと義母は霊能力者の家系の出であり、純潔を失う前は神に於いてその能力を活かしていたという。義母の出身地の島では名字でその能力を受け継いでいる家系であると知られるらしい。

義妹は最初の旦那さんとの間に生まれた子供だ。

「お兄ちゃん怖い」

子供を生める女となって初めての登校日にマリコは僕の腕をしかと？んで唇を震わせ言った。

「何があつた？」

僕は義妹が初潮を迎え能力に目覚めたことなどまったく知らず、怯えるマリコを不思議に思い訊く。

「聞こえるの。声が……」

周りには特段やかましく会話をしている人はいない。いつもと変わらない、ごく普通の平凡な風景しか僕の目には映っていない。

「心の声が、みんなの心の声が……」

冗談や悪ふざけではなさそうに、顔色は蒼白になり血の気が引いている。マリコは耳をふさぐが苦しげな表情は変わらず心の声というのが聞こえ続けているようだ。

「何が聞こえる。お兄ちゃんに言うてごらん」

「言えない。言いたくない」

首を左右に振り僕の要求を拒絶した。マリコは隠し事をしない性格の少女。悩み事があれば包み隠さず僕に相談をする子でこんな反応をするのは珍しい。僕は無理に訊くこともないと考え具合の悪そうな義妹をどうにか介抱しようかと判断した。

「帰りたい」

そういったマリコの言うとおりに僕とマリコは一旦は家に引き返し、マリコを置いて僕だけ学校へ行った。

翌日から、マリコは引きこもった。

活発さは影を潜め打ち沈んだ表情を浮かべ、ベッドの上でほぼ一日を過ごす。食事を摂取できず、食べては吐きを繰り返す。見かねた義母が病院へ行くように説得をしてもマリコは頑なに拒否をする。さすがに栄養を摂らないと危険であるので義母は先生を呼んで点滴を打ってもらうが先生はやはり入院しての治療を勧める。僕としてもそれがベストであると思う。

健康優良児であったマリコがみるみる痩せていく姿を視界にとらえ生活を共にしていくのは耐えられない。元気なマリコともう一度登校したい。

引きこもって二週間後

試験勉強をしている僕の部屋のドアを二度ノックする音が響いた。

義母さんかな？

「いいよ」

入ってきたのはマリコだった。足元がおぼつかない彼女を目にした僕は椅子からすぐさま立ち身体を支えベッドに横たえた。息が乱れている。

「きついなら寝てなきゃだめだよ」

「うん、ごめん」

「謝る事はないけどさ」

「お兄ちゃん……抱いて」

「えっ」

突然の言葉に僕は驚いた。おそらくは間抜けな顔をしていただろうな。

「抱きしめてほしいの」

「俺たち兄妹だぞ」

「そう、だからこそ抱いてほしいの。お兄ちゃんにしかこんなことお願いできない」

マリコはからかって言っているのではないのは分かっている。だが、僕とマリコは異性であり血はつながっていない。普通の兄妹とは違う……。

「お兄ちゃん。少しだけでいいの」

懇願する義妹に僕は兄としての責任感というか母性本能……男だけど、を刺激されマリコの願いを聞き入れ優しく抱いた。僕は彼女などいなくて初めて年頃の女の子を抱きしめたが痩せた外見とは裏腹に意外と柔らかかった。

「もういいかな」

しばらくの抱擁のあと僕が言うと

「ありがとう」

マリコは礼を言っ、自分の部屋へと戻っていった。そしていまではこれが日課となっている。

引きこもって一ヶ月、また今日もマリコが部屋にやってきた。僕は彼女をベッドに寝かせる。

「マリコ」

僕はある決意を持って抱きしめず寝ているマリコに口付けをした。マリコは抵抗をしない。

僕は彼女を救う方法を実行するつもりだ。

『マリコの純潔を奪う』

義母が純潔を破って能力が無くなったのならマリコとて同じであろう。他人にまかせても良いのだが他人にマリコの身体を穢されたくはない。兄としては間違っているだろうが僕は覚悟を決めている。「マリコ、これがお兄ちゃんの精一杯の愛情だ」

僕はマリコを抱いてその純潔を奪った。僕に抱かれている間、マリコは一言も発さず天井を空虚にただ見つめていた。

「罪深きもの……死して罪を償わん」

僕はマリコを部屋に送り届けた後、彼女が眠りについたのを確認し制服に着替えマンションの屋上から飛び降りた。

(後書き)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5185t/>

義妹への罪

2011年5月24日23時25分発行